

## 書 評 と 紹 介

名古屋行著

### 『ウェット夫妻の生涯と思想 ——イギリス社会民主主義の源流』

評者：大前 眞

著者は序章において19世紀末期から20世紀前半にかけてを「ウェット時代」と名付ける。「イギリスをインディヴィデュアリズムから脱却させ、コレクティヴィズムを確立させるにいたった…この歴史的な大きな運動に、先駆的で象徴的で偉大なる業績を上げて貢献したが故に、ウェット時代と名付けるのである。それは、ヴィクトリア時代がかの女王に象徴化される時代であったが故に、そう名付けられるのと同様である」(8)とその所以を述べ、「近代から現代への時代の推移を、IndividualismからCollectivismへの変化ととらえたのは、アルバート・V. ダイシーの達見であったが、イギリスで実際にこれを推し進める先頭に立ったのがウェット夫妻である、と筆者は考えている」とウェット夫妻に対する評価を掲げ、加えて「世紀転換期のイギリスの危機を脱却する道は、ウェット夫妻が構想したこのコレクティヴィズムにもとづくイギリス・コモンウェルスの再建以外には考えられなかった。それには、イギリス国家像の転換が必要にして不可欠であった。これが、すなわち大英帝国から福祉国家への転換

である。…ウェット夫妻がこれをなしとげたのである」と続ける。そのような視点から『ウェット夫妻の生涯と思想』を追うことにより、現労働党政権にまで続くイギリス社会民主主義の生い立ちを探ろうというのが本書の企図であるように思われる。とはいえ、序文に示されているように、本書の主要部分は、著者の旧著、『フェビアン協会の研究』(1987)と『イギリス社会民主主義の研究』(2002)というふたつの書物からの抜粋であり、いくらかの訂正加筆がなされているとはいえ、基本的な論点には大きな変更はないようである。以下、章を追って書評を進めることとする。

第一章は、「ビアトリス・ウェットの思想形成」と題され、ビアトリスの両親、リチャードとロレンシナ・ウェットの生い立ちとともに、第八女として生を受けたビアトリスが、彼女を疎んじる母親との心理的葛藤の中でいかに分裂した自我意識を育むようになったか、また、幼くして、父の友人であり時代を代表する実証主義哲学者、ハーバート・スペンサーの薫陶を受けて、知的世界に目を開かれたこと、長じてオクタヴィア・ヒルの主導する慈善組織協会に参加したビアトリスは、政界の花形ジョセフ・チェンバレンの求婚に背を向けて、チャールズ・ブースの貧困問題調査に参加することを決意し、社会学者の道を歩み始めたことが記される。著者は、主としてビアトリスの自伝的回想録である『私の修業時代』(*My Apprenticeship*)によりつつ、彼女の知的遍歴を、当期中産階級に属し、社会改革に熱意を持った若者達に共通する「罪の意識」の産物であるとする。高い教養を持った内向的な少女が、慈善活動を経験する

ことによって社会悪に目覚め、同時に自己の属する階級の罪深さを知り、高名ではあるが強圧的な求婚者を退けて、当時名うての社会主義者と結ばれ、夫婦して貧困と労働問題の研究に身を捧げる。本書が提示するビアトリスの青春時代は、おおよそこのようなものであるが、実際のビアトリスは『ナインティーンズ・センチュリー（19世紀）』紙に掲載された独身時代の論文、「ロンドンのイースト・エンドにおけるドック生活」に見ることができるように、波止場労働者の失業と困窮を、「無気力で、まともな仕事をこなす根気もない者や、役立たず、不平家、そしてまた本当の意味で不運な人々にとって、ロンドンには、比較的少ない労苦をもってぎりぎりの生活を営む絶好の機会を与えてくれるかのように見えるのだ」Beatrice Potter, “A Lady’s view of the Unemployed at the East”, Pall Mall Gazette, 18 Feb.1886) と書いて、当時、政府が企画していたイースト・エンドでの公共事業実施に対し、地方の失業者が目先の安楽を求めてみさかしくロンドンに殺到する結果を招くのみであるとして反対していた。そこに見ることができるのは、1834年の新貧民法に象徴される貧困の自己責任論であり、「罪の意識」ではない。おそらくビアトリスの社会主義への転向は、著者、そしてビアトリス本人が主張するほどには分かりやすすくないのである。

第二章「シドニー・ウェップの思想形成」では、シドニーの生い立ち、ビアトリスとの出会いについて語られる。シドニーが生まれ育ったレスター・スクウェアにほど近いクランボーン街が、その頃、著者の言うように「喧噪と退廃と貧困が満ちあふれていた」とは思えないが、下層中産階級に属する美容院兼雑貨屋を営む両親に育てられた彼は、著者の言うとおり、生粋のロンドンっ子として成長し、学業に秀で、ス

イス、ドイツへの留学ののち、株式仲買人となったものの、これに満足することなく、1881年、文官任用試験を経て官界に入った。植民地省一等書記官となったシドニーは、親友シドニー・オリヴィエを得て、政治的、学問的関心を相互に啓発し合った。劇作家のバーナード・ショーや学校教師のグレアム・ウォラスがそれに加わり、彼らはのちにフェビアン協会の中心メンバーとなる。著者は「高級公務員をめざすこの自己教育の過程で」シドニーは「公共」の観念を形成したとする。「高度の専門知識と深い教養、訓練された技能、そして手に入れた権力、それらをそなえたプロフェッショナルの新しい社会階層」(57)としてのシヴィル・サーバントが1880年代にひとつの職業として確立しつつあったことは間違いなし、フェビアンたちの多くがこのような階層に属していたことも事実である。ただ、これらの人々に期待された「職業のエートス」(著者は「公共の精神」であるとしているが)、それを職業上の信条だけではなく、個人の人生哲学にまで敷衍し、自らの結婚生活をも「委員会」と見なすほどの自我否定にまで到達したのがシドニー・ウェップであったとすれば、そこにはなんらかの個人的な特殊事情があったのではなからうか。たとえば、G.B.ショーはフェビアン協会におけるシドニーの僚友であったけれども、シドニーの自我否定を共有していたとは、とても思えないのであるから、ウェップ夫妻の生涯を標題とする以上、この点について著者の見解が示されていないことは残念である。

第三章「ウェップ夫妻とフェビアン協会」は、フェビアン協会の発展過程をたどりながら、それへのウェップ夫妻の関与と貢献を論じているが、前述の既刊書、『フェビアン協会の研究』第三章と五章からいくつかの節を抜粋して再編

集したもののように見受けられる。そのせいか、記述が時系列を外れ、内容的に重複する部分が多いけれども、フェビアン社会主義の特徴とされる、漸進主義、浸透政策、コレクティヴィズム思想の成立過程が描かれる。そしてこのような政治スタイルを、著者は「与党の思想」(102)と名付け、それをフェビアン協会指導部の国家観に由来するものと論じている。しかし、ウエップ夫妻とフェビアン主義者にとっては「最高の『公共の福祉』に反し、共同社会全体の利益に有害であるものは、たとえそれが『労働者の権利』であろうと、許すことはできない」と考えられた、との論には違和感を否めない。同じ行論で、19世紀が深まるとともに国家は「忙しい家政婦」となるにいたったとのシドニーの主張を、「まことに楽天的なものがあつた、国家や政府に対する警戒心はみじんもみあたらない」と断じているのであるが、忙しく働く家政婦のような国家を理想とすることは、強権的な国家を称揚することと同義であろうか。フェビアンたちは家政婦が暴君に変貌する可能性について真剣に憂慮しなかつたことは事実であり、そのことで彼らは多くの批判を浴びてきたが、彼らは著者が「イギリスの政治文化」と呼ぶものの中で、それを杞憂として退けたのではなかつたか。本章の結語、19世紀末においてウエップ夫妻は「既成の公共性と転換させることによって、新しい社会主義の政治文化をつくり出そうとした」との肯定的とも見える評価とは齟齬するよう思われるが、どうであろうか。

第四章は、「社会主義コモンウェルスの構想」と題される。主として夫妻の著書、*A Constitution for the Socialist Commonwealth of Great Britain*の分析である。ウエップ夫妻は、同書の中で、「明日の協同民主制」のあるべき姿を論じたのだが、そこでは、外交、国防

と警察を司る政治議院、そして内政を担当する社会議院というふたつの立法機関を持ち、産業が国有化され、労働組合と消費協同組合によって生産者そして消費者としての市民が代表されることになっていた。著者はウエップ夫妻の構想を紹介したのち、ここでも夫妻が「新しい社会の基底に」「公共の精神」を据えていることを指摘し、そこに「一太刀あてれば血が吹き出る」ようなウエップ夫妻のモラリズム、「ヴィクトリア朝風の福音主義のエートス」を見るべきであると書く。にもかかわらず、同章の「おわりに」においては、夫妻の「ぬきがたい『制度信仰』」について触れ、「民主主義を政治統合の制度としてしかとらえられなかつた」「ヴィクトリア朝の恵まれた知識人」としての夫妻の限界が指摘される。ウエップ夫妻にとっては「公共の精神」こそが、統治の手段と化した現状の民主制に新しい息吹を吹き込む存在であつたのだから、両者は補完し合うはずのものであつたのではなからうか。

第五章「イギリス社会民主主義の形成と展開」の冒頭、ギルド社会主義を標榜してウエップ夫妻と対立し、夫妻を「官僚的コレクティヴィズムの真正の代表者」と非難したG.D.H. コールが、のちに夫妻の著書『産業民主制論』を読んで前言を撤回し、和解したとのエピソードが、著者自身によって語られ、著者自身も夫妻が「決してたんなる国家社会主義者とか官僚的社会主義者ではなかつた」と評するのを見るとき、読者のウエップ夫妻像は焦点を失うのではないかと危惧される。

この章ではウエップ夫妻が第一次世界大戦を期に労働党との接触を回復し、戦後の労働党を労働組合の政治代表部から政権担当を展望できる第一野党に押し上げた「新綱領」の起草に携わることになる。著者はシドニーの政治手腕を

イギリスに社会民主主義を根付かせるのに大きく貢献したと高く評価しつつも、結果として『『大きな政府』、国家干渉の拡大、制度への過剰な期待』をもたらしたと批判する。その一方で「民主主義と社会主義は、ウェッブ夫妻によって『イギリス社会民主主義』になった」というのが、本章の結語である。その内実を示すために置かれたのが、第六章「イギリス福祉国家の理念と政策」であろうと思われるが、ここではウェッブ夫妻が提唱した「ナショナル・ミニマム」（国民的最低限）の原則が、シドニーにおいては「最低賃金と労働日の最低限」、ビアトリスにおいては苦汗労働の弊害を是正する立法の必要であるの認識から導き出されたこと、同時に「ナショナル・エフィシェンシー」（国民的効率）の前提条件として主張されたことが示される。ウェッブ夫妻はその実現に向けて、貧民法に関する王立委員会の委員となり、1907年、かの有名な「少数派報告」を起草することとなる。1834年貧民法の劣等処遇原則に固執する「多数派報告」に対抗すべく、全国救貧法解体委員会を組織して、生涯初めての大衆運動に乗り出すが、その結果は周知の通り、ロイド＝ジョージの国民保険法案の前になす術なく敗退した。それでも1918年に労働党の公式の政策として採用されることによって、「ナショナル・ミニマム」は「ベヴァリッジ報告」に受け継がれ、第二次大戦後のイギリス福祉国家体制の骨格を形成することになった、というのが著者の見解である。確かにベヴァリッジは「ナショナル・ミニマム」の実現を唱ってはいるが、彼の社会保障における一貫した保険主義は、ウェッブ夫妻が忌み嫌った政策手法であったことは、著者も触れているところであり、富の階級間ではなく、労働者階級内部での再配分である以上、社会主義的政策であるとはみなせないというのが通説である。こうした見解に対する言及が見

られないことが惜しまれる。

第七章は「後半生のウェッブ夫妻」と題される新稿である。第一次大戦を経て、労働党の再編に参画し、第二次労働党内閣の閣僚となり、同内閣の失脚とともに夫妻はスターリン統治下のソビエト共産主義の研究に没頭することになる。夫妻の書いた『ソビエト共産主義・新しい文明か?』は「老いらくの恋」に盲目となったための失敗作であると著者は評している。死後、夫妻は「イギリス・コモンウェルス」の守護神としてウェストミンスター寺院に葬られた。以上の経緯が簡略に記述されている。

終章は以上の行論をふまえて、「ウェッブ夫妻の今日的意義」が論じられている。社会民主主義、福祉国家、コモンウェルス（連帯と協同に基礎を置いて「ナショナル・オブティマム」の実現をめざす社会、と評者は理解したが）、それらの発展の中にウェッブ夫妻の思想は今日も生きており、著者はウェッブ夫妻の今日的意義を強調して、ウェッブ夫妻論を締めくくっている。本章が、たとえば「フェビアン主義者は、ブリテンにおけるマルクス主義の影響を打破したこと、労働党を鼓舞したこと、福祉国家、あるいはもっとひかえめにいえば、自治体改革とロンドン州議会との基礎を予告し、また実際にその基礎をおいたことを、主張した」けれども、その「主張は大部分神話的」としたE.J.ホブズボームの議論を論破し得たかどうかについては、ここで評者があわてた判断を下すよりも、読者の判断に委ねるべきであろうと考える。

ウェッブ夫妻の著作は、評者にとって、たとえば「郵政改革」のみを声高に唱えて選挙を行い、そこでの勝利でもって「イラク復興支援」が国民に支持されたかのようにふるまう政府の様子を見ては、『大英社会主義国の構成』で夫妻が展開した政治議院と社会議院への国会再編

論を想起し、「労働組合との関係を清算せよ」と迫られる野党の様子を見ては、『産業民主制論』における労働組合と政党とのあるべき関係に思いをはせるという意味で、今日的意義を少しも失ってはいない。彼らの提起した問題の多くは未解決のまま残されているという点では、著者に共感するものである。

終章のあとには「付論」として四編の評論が付されている。これらを評することは能力にあまるので、ここで筆を置くが、1980年代以降、ブレア政権成立までの労働党の変容を論じたものである。

最後に本書の評者としてよりも、本書に先立

って出版されたロイドン・ハリスン著『ウェブ夫妻の生涯と時代』の翻訳者としてのうらみごとを添えさせていただきたい。本書に先立つ2004年2月に上梓したのだが、その一年あまりのちに公刊された本書の準備に間に合わなかったせいか、言及がなく、2000年出版の原著は参考文献とされているのだが、その内容については触れられていない。読了後、いたく寂しい思いを抱いた。

(名古屋著『ウェブ夫妻の生涯と思想—イギリス社会民主主義の源流』法律文化社、2005年8月、viii+344頁、定価6,000円+税)

(おおまえ・しん 龍谷大学経済学部教授)

法政大学大原社会問題研究所叢書

◎好評発売中◎

◎組合員の減少を食い止め拡大するための戦略を検証！  
鈴木玲・早川征一郎編著 A5判・三三二頁・四四一〇円税別

労働組合の組織拡大戦略

組合員の減少を食い止めるための戦略を検証。兵頭淳史・山垣真治・浅見和彦・松尾孝一・長谷川義和・齋藤力・長峰登記夫・内藤直人執筆

◎革新政治と労働組合運動の今日的課題を提示  
五十嵐 仁著 A5判・四六〇頁・八三〇〇円

政党政治と労働組合運動

戦後日本における政党政治の変遷と労働組合とののかかりに焦点をあてて分析。革新政治の課題と労働組合運動の今日的課題を提示。

◎「社会史」の方法から見た社会運動史  
梅田俊英著 A5判・三六〇頁・五二五〇円

社会運動と出版文化

近代日本における知的共同体の形成  
大正デモクラシー期における社会運動と出版文化の歴史を手書きメモ、日記、手紙、予審調書など新しい史料で再構成。

◎普通選挙の実施という新たな政治条件下の農民運動  
横関 至著 A5判・三三〇頁・五二五〇円

近代農民運動と政党政治

農民運動先進地香川県の分析  
普選下の農民運動は小作争議と共に選挙・議会活動も重要な柱であり、その運動の動静が政党政治に及ぼした影響を解明。

◎占領期の日本労働運動史：労使関係史の基礎資料  
法政大学大原社会問題研究所編 A5判・三九〇頁・六八二五円

証言 産別会議の運動

産別会議の運動家の証言から産業民主主義の展開や経済再建との関連を視野に入れた労働運動史・労使関係史の解明。編集 吉田健二

◎戦後日本の起点で活躍した改革派ジャーナリストのオーラル・ヒストリー  
法政大学大原社会問題研究所編 A5判・四四〇頁・六九三〇円

証言 占領期の左翼メディア

占領当時の論壇状況や世論、政治・社会運動の背景、左翼運動の人物や秘話を知ることのできる得がたい史料。編集 吉田健二



御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751  
ホームページhttp://www.ochanomizushobo.co.jp/